

(5) 巡礼第二日、ポルトマリンから



パラス・デ・レイまで 24.3キロ

10月22日(月)7:30出発。冷たい朝、防寒着を着込んでサン・ニコラス教会前で朝の祈り。今日はパラス・デ・レイまで24.3キロ、前半が上り続きの今回の巡礼では一番長い距離。昨日来た時とは別の、出口に架かる長いつり橋の鉄板が厚い霜で凍っていた。滑らないようにヘッドライトで注意しながらミーニョ河を渡る。山道を暫らく進むと自動車道に出た。と、そこへ勢いよく走ってきた車が停まった。宿屋の主人だった。部屋のカギを持ってきてしまった石川、「ソーリー、ソーリー」と何度も頭を下げる。「ノープロブレマ、ブエン・ヴィアへ!」問題ないよ、良い旅を、と笑って手を振って見送ってくれた。それにしても何というタイミングの良さ。巡礼道はこの先ですぐに自動車道から左に反れて山道に入っていく。



出発前の9月11日、同時多発テロによる犠牲者追悼の日だった。この日、従兄の神父が大阪で亡くなった。その翌日12日には“平和な美しい国ニッポン”と言っていた安倍首相が辞意を表明した。そんなこともあって今回の巡礼目的を自分なりに決めた。世界の平和、人々の平和のために祈ろうと。巡礼の道は祈りの道、主とともに歩く道。応援してくれている家族や友人、知人たちと111キロを分かち合い、ともに歩き祈ろうと心に決めてきた。歩く、祈る、祈る、歩く。



上り坂、今日も先頭に行く竹内が、黄色の矢印や道標を見つける度に杖で指して教えてくれる。前後してロザリオを繰り返しながら歩いている小野は、朝早く起きて、歩く練習で痛めた足の指を一本一本丁寧に包帯で巻いていた。石川の左足の爪も今は大丈夫ようだ。思えば8月の末、石川が知らせてくれた。秋の季節で航空運賃が最も安い日、10月18日を出発日と決め、急ピッチの歩く練習を夫々が住む街中でザックを背負って行ってきた。そんな仲間と今こうして一緒に巡礼の道を歩けることの幸せを感じながら、仲間とその家族のために祈った。

行く手の赤茶けた土の道端にモチーラを降ろしてドッカーリと地面に座り込んでいる鬚面の男性に近づくと、背後の茂みの中からご婦人が飛び出した。ご用足し。この巡礼道ではごく自然なこと。でも、やっぱり文明人、お互いに気恥かしい。ニコリ笑顔も変だし、戸惑いながら「ブエンカミノ!」と、掛け声だけはトーン・ダウンしないように通り過ぎた。暫らくして誰いうとなく「ちょっと、俺も」。だが、この“ちょっとの間”がバカに出来ない。先に歩いている者との間隔が意外

と広がってしまう。なるべくなら皆一斉のほうがよい。「じゃあ俺も」。遠くの山並みに風力発電の白い大きな三枚羽根の風車が何台も並んでゆっくりと回っていた。



幾つかの小さな村を通過。足の手当のために休憩。そこへスコットランドの芸術家？らしい50代の父と20歳前後の息子が追いつき、暫く雑談して別れた。

(写真右)



坂を登った。ロサリオ峠の道標に(写真左)
”アニモ オス ファルタ ポコ” = 頑張れ、
残り僅かだよ、と書かれている。 パラス・
デ・レイはもうすぐだ。町の入口に建っている教会の前を横切って、広い道路に出たところで今日の宿屋 Hostal Plaza の受付になって

いるバルを見つけることが出来た。店の片隅に我々のモチーラが届いていた。何はさて措き、真っ先にバルの主人に頼んだことは、明日のメリデの宿を紹介して貰って予約すること。ついでにモチーラを送る手配も済ませ、ホットする・・・この主人に英語は通じないようだ、こんなこともあるかと紙に書いて用意していたスペイン語を読み上げた、、通じた！ 部屋の鍵を受け取って、バルから少し離れた3階建ての別棟の宿舎へモチーラを担ぎ込んだ。近くの小さなレストランに飛び込んで、一日で最も楽しい昼食、ワインと“巡礼者定食”で腹を満たした。疲れて大いびきの二人を部屋において小野と一緒に町の散策に出た。雲行きが怪しくなってきた。(つづく)